

ダルマキールティの聖典観：「プラマーナ・ヴァールティカ」第1章および自註の和訳（3）

大前, 太

<https://doi.org/10.15017/2328530>

出版情報：哲學年報. 48, pp.53-74, 1989-02-27. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ダルマキールティの聖典観

—『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(3)⁽¹⁾—

大 前 太

目 次

- Ⅲ. ヴェーダ聖典の非人為性に対する証因⁽²⁾を否定する。(第239偈—第246偈)
1. “作者が記憶されていないから”という証因を否定する。(第239偈)
 2. “学習に始まりがないから”という証因を否定する。(第240偈—第246偈)
(未完)

和 訳

Ⅲ

1. (G. 120, 8; M. 80, 13)

また, [ミーマンサー学派の者たちによって, ヴェーダ聖典の] 作者が記憶されていない [という理由] で, [ヴェーダ聖典の文章の] 非人為性が承認されている, ということである。[第239偈 ab]

また, [ミーマンサー学派の者たちによって, ヴェーダ聖典の] 作者が記憶されていない [という理由] で, このようなヴェーダ聖典の文章の非人為性が述べられているけれども,

こ [のような事柄] にさえ、復唱者が存在するとは、ああ！闇が遍満することだ。[第239偈 cd]

まず、どうして彼にだけこのような知恵の欠如が起こったのか、というように、我々の心は驚愕と憐憫とをともなっている。それを他の者たちまでも復唱するとは、ああ！無慈悲に世界を侵害する闇が遍満することだ。人が幸福を願って惑わされているときに、[このように語ったとしても、彼に] いかなる罪があるのか。

⁹³すなわち、仏教徒たちは、[ヴェーダ聖典の] マントラの作者はアシュタカ仙等⁹⁴であると記憶している。また、カナダの徒たち [=ヴァイシエーシカ学派の者たち] は、[ヴェーダ聖典の作者は] ヒラニヤガルバ [=ブラフマー神] であると [記憶している]。

[反論:] 「[ヴェーダ聖典の作者が記憶されているという] 彼等のそ [の陳述] は、誤った陳述である。」と言うならば。

[答:] 今や、このように [作者が記憶されているという陳述が誤りであるなら]、[ヴェーダ聖典] 以外のものも、何が人為的な [語] であるのか [何も人為的なものではない]。[すなわち、] クマーラサンバヴァ等 [の作品] において、[カーリダーサ等は、] 自己あるいは他者が作者であるということを表明しているけれども、それを [他の者たちは “汝等の陳述は誤った陳述であり、汝等は作者ではない。” と⁹⁵] このように否認するであろう。

[反論:] 「[クマーラサンバヴァ等は人為的なものであると承認されているのであるから、] それら [=クマーラサンバヴァ等] について [作者を] 否認する場合には、〈承認されている事柄によって拒斥される〉 (abhyupetabādha) [という過誤に陥る] ことになる。」と言うならば。

[答:] このこと [すなわち、作者が記憶されていないこと] だけが、[語が非人為的なものであるという] 承認の論拠であるではないか。したがって、何が拒斥されるのか。他者 [=ヴェーダ聖典の信奉者] にとっても、[ヴェーダ聖典の文章の作者を否認する場合に、] そ [のように 〈承認されている事柄

による拒斥〉という過誤に陥ること] はまったく同じである。

〔反論：〕「彼 [=ヴェーダ聖典の信奉者] にとっては，[ヴェーダ聖典は非人為的なものであると] 承認されているのであるから，[ヴェーダ聖典の作者を否認する場合でも，〈承認されている事柄による拒斥〉という] 過誤はない。」と言うならば。

〔答：〕何ゆえに，この者 [=ヴェーダ聖典の信奉者] に，[“ヴェーダ聖典は非人為的なものである” という] このような根拠のない承認が初めに存在したのだろうか。そして，根拠なしに理解するこの者が，どうしてまた，あるものについて [すなわち，ヴェーダ聖典の非人為性等について] 論証に依存し，[その結果] 人為的であるとか非人為的であるとか考察して，自らを苦しめるのか。まさにこのように [根拠なしにヴェーダ聖典は非人為的なものであると] 承認される [という理由] で，[ヴェーダ聖典の信奉者にとって，ヴェーダ聖典の作者を否認したとしても] 〈承認されている事柄による拒斥〉という過誤に陥ることがないとすれば，彼以外の者にとっても [〈承認されている事柄による拒斥〉という過誤に陥ることがない] ということは同じである。したがって，[クマーラサンバヴァ等について作者を否認する場合には 〈承認されている事柄による拒斥〉という過誤に陥ることになる] という] 非難はあたらない。そして，この者は，[“作者が記憶されていないから” という] このような種類の非人為性に対する論証因の特殊性を [人為的な文章であれ非人為的な文章であれ] 文章のなかに見出さないのに，あるいはまた，[人間の] 所産 [である語] の属性の特殊性を [ヴェーダ聖典の文章であれ世間の文章であれ] 文章のなかに見出さないのに，ある場合に [すなわち，ヴェーダ聖典の文章についてだけ]，[非人為性という] 特殊性を承認しているのである。したがって，彼の行動は信用できない。

⁶⁾また，[人間の] 著作であるという相承 (sampradāya) が中断していて，しかも作られたもの [であるというような語] が見られる⁷⁾。

〔反論：〕「人は，努力すれば，それらを [“それらはこの者によって作られたものである。” と] 知る。」と言うならば。

[答:] そうではない。なぜなら、[人が努力したとしても、必ず作者を想起するという] 必然性がないからである。[また、] 他のもの [=非人為的なものとされる語] について [も]、根拠のない他者の教示からは、[作者が] 認識されるとも認識されないと、確定することができないからである。また、自ら作ったものでも [それを] 否認する者が見られるからである。[そして、その場合に、] “これはこの者によって作られたのか、あるいは、他の者によって作られたのか。” という] 決定に至ることができないからである。

2. (G. 121, 7; M. 80, 29)

[この人間 [すなわち、ヴェーダ聖典の現代の学習者] が、他者から聞かずに [ヴェーダ聖典の] 字音や単語のこのような配列を述べることができないように、同様に、他者 [すなわち、ヴェーダ聖典の作者とされる者⁽⁸⁾] も [他者からの教示を必要とする。彼もまた他者からの教示を必要とする。というように] 始まりがないから、ヴェーダ聖典は非人為的なものであるということが証明される⁽⁹⁾。]と、ある者 [=ミーマーンサー学派の者] は言う。[第240偈]

彼に対して、「このように、[それが] 非人為的なものであるとしても、今や、何が人為的なものであるのか……」⁽¹⁰⁾云々という [“作者が記憶されていないから” という証因について指摘した] 同じそれが答えである。

すなわち、

あるいはまた、[ヴェーダ聖典] 以外に、[人間によって] 著わされたいかなる作品が、相承なくして他者によって述べられると知られているのか。[もし知られているのなら、] 'それ [=ヴェーダ聖典以外の作品] もこのように [非人為的なものであるとどうして] 推理されない [のか]。[第241偈]

実に、あるもの [=ヴェーダ聖典] について、現代人が [他者の] 教示なくして読誦することができないということ以外に、非人為性に対する根拠は何もない。そして、他のもの [すなわち] ある者によって著わされた書物について

も、他者 [=学習者] がそうであること [すなわち、他者による教示なくして読誦できないこと] は同じである。[非人為性の論拠として] それ [=教示なくして読唱できないこと] に依拠する者は、[ヴェーダ聖典の語であれ世間の語であれ] すべてがそうである [すなわち、非人為的なものである] と推論すべきである、あるいはまた、いかなるものも [非人為的なものではない] と推論すべきである]。

「それ [=世間的な文章] はそのように [非人為的なものであると] 承認されていないから……」云々についても、「承認がそれ [=非人為性の論証] の拠り所なのであるから……」云々とすでに [答えを] 述べている⁽¹¹⁾。

(G. 121, 17; M. 81, 7)

さらにまた、

あるもの (A) と同種のもの (A') が、ある [原因] (B) から [生じることが] 確知される時、[(A') と同種であるという点で] 区別されない他方 (A) も、たとえその原因が知られていなくても、それ [=原因 (B)] から [生じる] と認識される。たとえば、火と薪のように⁽¹²⁾。[第242偈]

原因が知覚されないから、“原因をもたない” (ahetuka) と言われるのではない。なぜなら、存在物 (A) は、原因が知覚されていなくても、それ以外のもの [=原因が知覚されているもの] (A') と本性を異にしないということになれば、そのようである⁽¹³⁾ [すなわち、(A') と同じ原因をもつ] と推論されるからである⁽¹⁴⁾。[人間という] 原因の本質が欠如しているのに、かの本質 [すなわち、人間を原因とする語と共通の本質] が [ヴェーダ聖典の語に] 欠如していないとすれば、[原因が欠如すれば欠如するという] 結果の属性を逸脱することになるから、か [の人間] に由来する [いかなる文章も] 存在しないであろう。したがって、いかなる [世間的な語] もそのようである [すなわち、人為的なものである] と言えない [であろう]。あるいはまた、このように、この [人間という] 原因に相応するような、[ヴェーダ聖典の語とは異

なる人為的な語の] 特殊な本質が示されねばならない。[そして、もしそれが示されるのであれば,] そ [の特殊な本質] によって, [非人為的なものとして] 承認されている [ヴェーダ聖典の語] および [非人為的なものとして] 承認されていない [世間的な語] が, 承認されている事柄と逆になること [すなわち, 順に人為的なものおよび非人為的なものとなること] はないであろう [しかし, 実際にはヴェーダ聖典の語と世間の語との間にはいかなる本性の相違もない]。そして, [人間という] 原因の本性が欠如しているのに, 存在物 [すなわち, ヴェーダ聖典の文章] が [人為的な文章と] 異ならないとすれば, [世間的な文章の人間によってもたらされる] 相違は根拠がなく, したがって, いかなる場合でも排除されないであろう。以上のことから, 本性 (A) が (B) から生起することが知覚されているとき, それ [=本性(A)] は, [原因の知覚されていない] 他ものにおいても, [原因が知覚されているものと] 区別されず, 本性的にそれ (B) の結果という属性をもつことを逸脱しない。火と薪のように¹⁵⁾。

(G. 122, 1; M. 81, 16)

その場合に, [人間の] 所産 [である世間的な語] と共通なもの [のみ] が [ヴェーダ聖典の語に] 見られるのであるから, [世間的な文章とヴェーダ聖典の文章の] 相違を示さずに, [ヴェーダ聖典が非人為的なものであることを論証するために,] 証因が詳細に述べられているけれども, それらはすべて, 逸脱している [すなわち, 不確定である] ¹⁶⁾。[第243偈]

たとえば, 「旅人によって起こされた最初の火でさえ, 別の炎を前提とするのであって, 木を擦り合わせることを前提とするのではない。旅人の火であるから。[別の炎から起こる] 直後の火のように。¹⁷⁾」という [論証式における “旅人の火であるから” という証因が逸脱している] ように。

[反論:] 「しかし, どうして, 旅人の火が逸脱しているのか。実に, 炎から生起する能力に依って, [旅人によって起こされた] 火の別の原因 [すなわ

ち、木を擦り合わせること] が否定される。つまり、もし [旅人によって起こされた最初の火が] 炎なくして存在するのであれば、他の場合 [すなわち、炎を前提とする旅人の火の状態] においても¹¹⁸⁾ [それは炎なくして] 存在することになる。と [言うならば]。

[答:] その場合に、炎からの生起と他からの生起 [すなわち、木を擦り合わせることから] 生起とは、[火一般に対しては、相互に] <拒斥されるもの・拒斥するものという関係> (bādhyabādhakabhāva) にはないので、“炎から生起する” [という火の本質] は、別の仕方でも [すなわち、木を擦り合わせることから] あるであろう。したがって、二つの属性 [すなわち、炎から生起する属性および木を擦り合わせることから生起する属性] が一つの事物 [=火一般] においてありうるのであるから、かの旅人の火、あるいは別の事柄 [すなわち、ヴェーダ聖典の学習等] は、一方に決定されないであろう。したがって、[“旅人の火であるから”あるいは“ヴェーダ聖典の学習であるから” というような証因は] 逸脱しているのではないかと懸念される。[炎から生起することと木を擦り合わせることから生起することという] 二つの属性が起こるといふ相矛盾するそのことも、実在一般 [すなわち、火一般] において “矛盾がない” と言われるのであって、様態を異にする特殊 [すなわち、特殊な火] において [“矛盾がない” と言われるの] ではない。なぜなら、部分をもたない本体が、それでありかつそれでないというのは矛盾であるからである¹¹⁹⁾。しかし、炎からの生起と他 [=木を擦り合わせること] からの生起とは、旅人の火 [一般] においては、<拒斥されるもの・拒斥するものという関係> にない。なぜなら、それ [=旅人の火一般] は、炎から生起する以外にはありえないということがないからである。このような旅人の火は “炎から生起する” と言うこともできよう。[しかし、] すべて [の火] が [“炎から生起する” とは言え] ない。なぜなら、それ [=原因の相違によって異なる火] において¹²⁰⁾、[木を擦り合わせることによって惹起される] 特殊性を捨て去ることができないからである。そして、[木を擦り合わせることによって惹起される] 特殊性がありうるときには、[火が] そのような様態にあること [すなわち、炎

から生起するという様態にあること] に対する必然性がないからである。

「[旅人によって起こされた最初の火が] 炎なくしても存在するのであれば、[旅人の火は] 他の場所 [すなわち、炎のない場所] にも存在するであろう。」とも述べられている。[木を擦り合わせるという] 集合因によって [かの旅人の火が] 生起する、そ [の集合因] が存在するのであれば、[炎のない場所にも旅人の火は] 確かに存在する。[また、] こ [のような集合因] が存在することを示したうで、[炎がなければ] それ [=火] は存在しないと説くのであれば、あるいはまた、そこ [=木を擦り合わせるという集合因が存在する場所] に炎 [が存在する] と説くのであれば、このこと [すなわち、火は炎を前提とするのみであると言える] であろう [しかし、実際にはそのようなことはない]。

以上のことから、ある者 [=ヴェーダ聖典を創作する能力のない者] の学習が他者 [=教師] を前提とする [ことが見られるからといって]、すべて [の学習] がそのようである [すなわち、他者を前提とする] ということが成立するわけではない。なぜなら、それ [=学習] は、別の仕方ではありえない [すなわち、他者を前提とすることなしにはありえない] ということがないからである。しかし、それ [=ヴェーダ聖典] を創作する直覚のないそのような者の [学習] は、そのようであろう [すなわち、別の学習を前提とするであろう]。したがって、そのようなもの [=ヴェーダ聖典を創作する能力のない者の学習] は、そのようである [すなわち、学習を前提とする] と言えるであろうが、特殊性がありうるのに、それ [=学習] が、区別なしに [“すべての学習は学習を前提とする” と] 述べられるならば、[必然関係が成立しないのであるから] 優美さは得られない。

【反論：】「どうして、[ヴェーダ聖典を自ら創作して学習するという] 特殊性がありうるのか、『[ヴェーダ聖典の作者とされる] かの人間たちにも [ヴェーダ聖典を創作する] 能力は決してない、[人間であるから、] 現代の人間のように。』[と論証される] ときに。」[と言うならば。]

【答：】 この場合でも、[ヴェーダ聖典を創作する] 能力と人間との間に矛

盾が見られるということは決してない。したがって、矛盾しないものを肯定する〈非認識の論証式〉は〔非存在を〕確知させるものではない。すなわち、超感覚的なものについて矛盾が認識されるということはない、ということはずでに述べた⁽²¹⁾。また、こ〔の論証式〕は前の論証式⁽²²⁾と異なるない。

〔反論：〕「もし〔古代の〕人間が〔ヴェーダ聖典を自ら創作した後、学習することが〕できたのであれば、現代の〔人間〕も〔できるであろう。〕と〔言うならば〕。

〔答：〕〔人間に〕相違がないならば、そうであろう。しかし、それ〔＝人間に相違がないということ〕は証明し難い。一人〔の人間〕に能力がない場合にすべての人間に〔能力がない〕という〔推論における“人間であるから”という証相〕も、前と同様に〔すなわち、“学習であるから”という証相と同様に〕逸脱している。なぜなら、〔人為的な作品と考えられるマハー・〕パーラタ等について、現代の人間に〔それを創作する〕能力がなくとも、〔ヴィヤサ等の〕ある〔卓越した人間〕には〔創作〕能力があることが知られているからである。

以上のことから、原因を弁別する者は⁽²³⁾、それから生起するおよびそれから生起しない事物についても、〔その〕本性の相違を示さなければならない。それ〔＝本性の相違〕が存在しないのであれば、すべてがそれを本性とする、あるいは、いかなるものも〔それを本性とし〕ない〔かいずれかである〕⁽²⁴⁾。しかし、こ〔の世〕において⁽²⁵⁾、世間的な〔文章〕とヴェーダ聖典の〔文章〕の間の本性の相違を我々は見ない。それ〔＝本性の相違〕が存在しない場合には、〔字音の配列という〕そ〔の両方〕に共通な相のみが見られるのであるから、〔本性的に〕同一である〔ヴェーダ聖典の文章や世間の文章〕について〔人為的であるとか非人為的であるというような〕何かある属性を⁽²⁶⁾弁別するならば、〔その者は、〕それ〔＝ヴェーダの文章および世間の文章〕の本性でありうべきそれ〔＝字音や単語の配列という共通相〕によって、誤っているのではないかと懸念されるような議論をなす者となるのである⁽²⁷⁾。

⁽²⁸⁾→〔反論：〕「ヴェーダ聖典とヴェーダ聖典でないものの間には、それであ

るといふ [すなわち、前者はヴェーダ聖典であり、後者はヴェーダ聖典でないといふ] 相違が確かに存在するではないか。] [と云うならば。]

〔答：〕 確かに存在する。しかし、[このような相違は、] それら [=ヴェーダ聖典とそうでないもの] の間にだけ [存在するの] ではない。それではどうであるのか。ディンディカ・プラーナ⁽²⁹⁾および [それ] 以外の [プラーナ] の間にも [このような相違が存在する]。しかし、自己の来歴の相違を明示するものである名称の相違は、[ヴェーダ聖典が] 人間の著作であることを拒斥しない。なぜなら、別のもの [たとえば、プラーナ] も [非人為的なものとなるといふ] 過誤に陥ることになるからである。もし、そのような配列を人間が創作することができないのであれば、あるいはまた、協約を定めていない者がすでに完結している [字音や単語の] 配列を [聞いただけで] 弁別しうるのであれば、明らかにヴェーダ聖典は非人為的なものである [と言えるのだが]。⁻⁽²⁸⁾

⁽³⁰⁾→ [反論：] 「人間はマントラを決してつくり出すことができないではないか。」 [と云うならば。]

〔答：〕 このことは後に考察するであろう⁽³¹⁾。

さらにまた。マントラという何かある別のもの [が存在するの] でない。それではどうであるのか。真実 (satya) や苦行 (tapas) の威力 (prabhāva) をそなえた者たちの、望ましい事柄を実現させる言明 [がマントラ] である。そ [のような言明、すなわちマントラ] は、今日でも人間において確かに見られる。[その理由は、] それぞれ、真実の誓言 (satyādhiṣṭhāna) の力によって⁽³²⁾、毒や燃焼等を抑制することが見られるからである。また、あるシャバラ族の者たちは、今日でもマントラを作っているからである。また、ヴェーダ聖典に属さない仏教徒⁽³³⁾等のマントラおよびマントラの儀軌 (kalpa) が見られるからである。そして、それら [=仏教徒等のマントラおよび儀軌] は、人間の著作であるからである。それら [=仏教徒等のマントラおよび儀軌] でさえも非人為的なものであるとすれば、今や、どうして非人為的な [文章] が [すべて] 誤りがない [ということになる] のか。すなわち、仏教徒のマントラおよび儀軌とそれ以外のマントラおよび儀軌において、殺生・淫行・我見等⁽³⁴⁾が、[前

者においては] 不幸の原因であると、そして [後者においては] 別様に [すなわち、幸福の原因であると] 述べられている。同一 [の非人為的なもの] において、矛盾することを述べるその二つ [の文章] がどうして真実であろうか。それ [=仏教徒のマントラおよび儀軌] において [一般に周知されている意味とは] 別の意味が想定されるならば、それ [=別の意味が想定されること] は、[仏教徒のマントラおよび儀軌] 以外 [のヴェーダ聖典のマントラおよび儀軌] についても同じである。したがって、[すべてのマントラおよび儀軌において別の意味が想定されるという可能性があるから、] 意味が決定されないことになり、その結果 [マントラおよび儀軌によって説かれている] いかなるものも実行されることはないであろう³⁵⁾。そして、このように [意味が決定されないがゆえに実行されない場合に]、非人為的な [文章] が存在したとしても、[それは人間の目的に対して] 役に立たない。仏教徒の [マントラ] がマントラでないとすれば、それ [=仏教徒のマントラ] 以外の [ヴェーダ聖典のマントラ] についても、[それがマントラであることを示すために] 神裁の聖水を飲み干すべきであろう。仏教徒の [マントラ] も、[解] 毒の作用 (viś-akarman) 等をなすということが見られる。[そのことによって、] それ [=仏教徒のマントラ] がマントラでないということが否定される³⁶⁾。字音をもたない、印契 (mudrā) ・曼陀羅 (maṇḍala) ・観想 (dhyāna) によっても、[解毒等の] 作用がなされる。しかし、それら [=印契等] が、非人為的なものである、[あるいは] 恒常的なものであるというのは理にかなっていない。それら [=印契等] が [人間の] 創作でありうる場合に、[真実等をもった] 人間が字音の配列 [を創作するという] ことに対するいかなる妨げがあるのか。³⁷⁾ それゆえに、これら [人間] に [マントラを] 創作する能力がないということは決してない。

[問:] 「今や、真実 [を語る人間] から生まれる³⁷⁾ マントラおよび儀軌が、どうして相互に矛盾するのか。」

[答:] 実に、それら [=マントラおよび儀軌] は、あらゆる場合に、真実 [を語る人間] から生まれるというわけではない。[そうではなく、] それらは、

威力をそなえた人間の [“字音および単語のこの配列を学び、その儀軌を実行する者に、私は誓言した通りの事柄をもたらすであろう。” という] 誓言 (pratijñā) ⁽³⁸⁾ を特質とするものもそれ [=マントラおよび儀軌] であるのである。[そして、] その威力は、特殊な趣 (gati) および特殊な [マントラの] 効験 (siddhi) からもあるであろう。

〔問：〕「もしマントラが人為的なものであるなら、どうしてすべての人間がマントラを創作しないのか。」

〔答：〕 それ [=マントラ] を創作する手段 [である真実・苦行等] を欠いているから [すべての人間がマントラを創作するわけではない] である。[しかし、] もし [人が] そのような真実・苦行等をそなえているのであれば、[マントラを] 確かに創作する。さらにまた、[詩を創作する直覚をそなえた] 人間は詩を創作するのであるから、[詩を創作する直覚を欠いていても人間であるという点で同じであるから] すべての人間が詩を創作することになるであろう。あるいはまた、[詩を創作する直覚をそなえた人間が詩を] 作らないとすれば、誰も [詩を] 作らないであろう、[詩を創作する能力のない] か [の人間] のように。したがって、このような適切な表現は前例がない⁽³⁹⁾。

〔反論：〕「確かに、マントラを創作する手段を欠いた [人間] は、マントラを作らない。しかし、[マントラを創作する手段である真実等] が完全にそなわっているというそのことをいかなる [人間] にも我々は見出さない。なぜなら、人間はすべて属性を等しくするからである。」[と言うならば。]

〔答：〕 これについてはすでに「真実等をそなえた者たちの言明や誓言以外に、マントラという何かあるまったく別のものがあるのではない。」と [答えを] 述べている⁽⁴⁰⁾。それら [=真実等] は、ある人間たちには見られるのである。すべての人間がそれら [=真実等] を欠くということも、それら [=真実等] がありうることは [人間であることと] 矛盾しないのであるから、決定されない。そして、感官を越えた本性をもつものに対しては、非認識は [非存在を] 確知するための証因ではない。想起 (smṛti) ・智慧 (matī) ・洞察 (prativēdha) ・真実 (satya) ・能力 (śakti) [というマントラの原因] はす

べて〔の人間〕に存在するわけではない。それら〔＝想起等〕を達成する手段の教示の相違〔があるアーガマにだけある〕ように、〔想起等の〕異なる〔心的〕徳性をもたらす原因も〔ある人間にだけ〕あるであろう。また、〔他者の心の徳性は⁽⁴¹⁾〕現に存在していても、すべてが知覚されうるというわけではない。まさにこのゆえに、〔他者の心的徳性は〕知覚されなくとも否定されないのである。また、人間において、何かある〔心的〕徳性が生起せんとしているときに〔それを〕妨げるようなものは存在しない。なぜなら、拒斥されるものが知覚されないのであるから、〈拒斥されるものと拒斥するものという関係〉が成立しないからである。以上によって、一切智 (sarvajñāna) の否定等⁽⁴²⁾も答えを述べたことになる。それ〔＝離貪性の否定等⁽⁴³⁾〕についても、“ある種のこ〔の人間〕はそれ〔＝離貪性〕を達成する手段の教示をもたないけれども、このような者は〔離貪性等の徳性をそなえた者では〕ない。”というのが妥当なのであって、〔離貪性等を〕知らしめる〔証相〕が知覚されない者はそれを本性とする者〔すなわち、離貪性等の徳性をそなえた者〕ではないということまでも〔妥当であるの〕ではない。〔ある事物が〕存在していても、〔証相である〕結果が起こっていないということがありうるからである。また、本性的に隔たっているがゆえに、〔“これがこれの原因である”と〕示すことができなことがあるからである。以上のことから、“学習は別の学習を前提とする”〔という論証されるべき事柄に対する〕“学習であるから”という〔証因〕は、〔人為的な文章であるマハー・〕パーラタの学習〔という異類例〕においても存在するから、逸脱している。

〔反論：〕「“ヴェーダ聖典の”〔という限定詞〕によって限定されているのであるから、過誤はない。」〔と言うならば。〕

〔答：〕しかし、別の仕方でも〔すなわち、自ら創作した後〕学習できないというようないかなる特殊性がヴェーダ聖典の学習にあるのか。実に、異類例〔＝学習を前提としないもの〕と矛盾しない〔“ヴェーダ聖典の”という〕限定詞はこれ〔＝異類例〕から証因を排除しないのである。なぜなら、矛盾しない二つの事柄〔すなわち、ヴェーダ聖典であることと学習を前提としないこ

と] は一つのもの [=ヴェーダ聖典の文章] にありうるからである。

[反論:] 「現代 [の人間] は [他の学習を前提として] 学習するから。」と
言うならば。

[答:] このことはすでに答えを述べている⁽⁴⁴⁾。

[反論:] 「[作者が] 知覚されないから。」と言うならば。

[答:] このこともすでに否定した⁽⁴⁵⁾。そして、単なる無知覚は非存在を知らしめない。したがって、[“ヴェーダ聖典の学習であるから” という証因は] まさに逸脱している。それゆえに、[“ヴェーダ聖典の” という] 限定詞は [“学習であるから” という証因に] 特殊性を付与するものではないから、述べられていないのと同じである。

“ヴェーダ聖典の学習はすべてそれ [=ヴェーダ聖典] の別の学習を前提とする” という遍充も成立しない。なぜなら、[ヴェーダ聖典の] すべて [の学習] がそのようである [すなわち、学習を前提とする] ということが成立しないからである。しかし、ある種 [の学習、すなわち自ら創作する能力のない者の学習] はそれ [=他の学習] に基因するということが知られているけれども、そのようなものはそうである [=他の学習を前提とする] と言えるであろう。

[愚鈍等の] 特殊性が見られるのに、それ [=愚鈍等の特殊性] を放棄して、それ [=他の学習] に基因するものとして [ヴェーダ聖典の学習] 一般を述べるのはまさに逸脱している。たとえば、火を証明する際の [煙の] 白性・実体性 [が逸脱している] ように。以上によって、貪欲等を証明するために [挙げられた] “ことばを話す [から] ” 等 [の証因が逸脱しているということ] が答えられた。

(G. 125, 9; M. 83, 22)

あるいはまた、この学習 [=ヴェーダ聖典の学習] が、学習を前提とすることを証明するものであるとしよう。

かくして、あらゆる場合に [ヴェーダ聖典には] 始まりがないということ [だけ] が成立するであろう。[しかし、ヴェーダ聖典が] 人間に依拠しないということは成立しないであろう。[始まりがないという] それ [だけの理由] で [ヴェーダ聖典が] 非人為的なものであるとすれば、他のもの [=世間一般の言語活動] も [無始時より起こっているのであるから、] 人間に依拠しない [すなわち非人為的なもの] となろう。[第244偈]

実に、他ならぬ人間が、自ら推量してあるいは他者から [聞いて]、学習するのである。発声器官が活動していないのに、これら [人間] の語が自ら発するということはない、[もしそうであれば、語は] 非人為的なものであろうが。また、もし人間に始まりがあるのであれば、[語が] 非人為的なものであるということもあるであろう。その時でも、[最初の人間の学習が] 別の学習を前提とするということは成り立たない。なぜなら、教師 [たる他の人間] が存在しないからである。それ [=ヴェーダ聖典] を最初に学習した者が [自ら推量してヴェーダ聖典を学習するのであるから] 作者に他ならないであろう⁽⁴⁶⁾。それゆえに、これ [=ヴェーダ聖典の学習] は、子供の砂遊び等⁽⁴⁷⁾のように、前々の経験によって起こる始まりのない人間の営為である⁽⁴⁸⁾。したがって、非人為的なものではないであろう。

(G. 125, 19; M. 84, 1)

始まりがない [という理由] で、[ヴェーダ聖典が] 非人為的なものであるとすれば、今や、さらに多くのものが非人為的なものとなる。すなわち、

蛮族等⁽⁴⁹⁾の習俗、虚無論者の言明も、始まりがないから、そのようである [すなわち、非人為的なものである]。なぜなら、[それらは] 前の潜在印象によって連続して起こるからである。[第245偈]

母親の婚礼⁽⁵⁰⁾等⁽⁵¹⁾の蛮族のある習俗、およびマダナ・ウトゥサヴァ祭⁽⁵²⁾等⁽⁵³⁾も始まりがない。また、[ダルマ・アダлмаという] 不可見なもの (apūrva)⁽⁵⁴⁾や来世 (paraloka) 等を非難する虚無論者の言明 [も始まりがない]。実に、

[現代の人間は、] 他者によって潜在印象が付与されていなければ [すなわち、知識を習得していなければ⁽⁵⁵⁾]、そ [のような営為] を実行しない。自己の直覚によって [詩のような] 協約を形成する者たちも、聞いた通りの意味に対して様々な選択肢をひとまとめにしてのみ行動を起こす [すなわち、詩を創作する] からである。あるもの [=意味] はある [教示者] に由来するのである。したがって、同一の教示者が⁽⁵⁶⁾連続して存在することはないから、“それ [=詩] は他を前提とするものではない”と言われるのである。まして世間一般の営為は、[他者からの] 経験通りに起こるのであって、正しく行なわれたり、誤って行なわれたりする⁽⁵⁷⁾。

[反論:] 「最初の劫に属する者たちにおいては、いまだかつて見られなかった営為が後に実行されるとみなされるではないか。」[と言うならば]

[答:] そうではない。なぜなら、彼等 [=最初の劫に属する者たち] も、他者によって潜在印象を付与されているので、[後に] 補助因 [の存在] に応じて、覚醒する [すなわち、行動を起こす] からである。

[反論:] もし、「[始まりがないのであるから、蛮族の習俗等は] すべて非人為的なものであろう。」[と言うならば]

[答:]

[始まりがないというだけで] そのような非人為性が成立したとしても、いかなる利点があるのか。[第246偈 ab]

“人を欺かないであろう”と [いう理由で] 非人為性が承認されている。[しかし、] それ [=非人為性] は、何かある人を欺くような [世間的な営為] にも、始まりがないのであるから、存在する。したがって、非人為的なものである [と想定して] 何になるのか。

(G. 126, 6; M. 84, 15)

あるいはまた、ヴェーダ聖典の文章のみが非人為的なものであるとすれば、

〔解釈者の相違によって、ヴェーダ聖典の〕意味の形成〔＝意味の解釈〕の相違が見られるから、〔ヴェーダ聖典の意味について〕しばしば疑念が起こる。

〔第246偈 cd〕

〔ヴェーダ聖典の文章が〕非人為的なものであるとしても、〔ヴェーダ聖典の文章が〕その表示対象の各々定まった直覚を〔ヴェーダ聖典の文章に従って行動を起こそうとしている者に〕生起させるのであれば、信頼性があるであろう。しかし、〔実際に〕は、語源学者たちやミーマーンサー学派の者たち等⁽⁵⁸⁾が、意のままに〔語を〕挿入したり削除したりして、ヴェーダ聖典の文章を改竄するということが見られる。そして、〔解釈の相違によって惹起され相互に矛盾する〕その意味がそれら〔＝ヴェーダ聖典の文章〕にありえないということはない。なぜなら、〔語の〕対象に対する関与〔すなわち、語が対象を表示するものとして機能すること⁽⁵⁹⁾〕は協約に依拠するのであるから、同一の文章にも〔協約に応じて〕様々な〔意味の〕相違がありうるからである。〔また、〕語基および接辞〔も〕様々な意味が述べられているからである。〔また、〕慣用（*rūḍhi*）も必ずしも認められないからである。〔その理由は、ヴェーダ聖典には〕慣用的でない語⁽⁶⁰⁾も多く〔見られる〕からである。〔そして、〕それ〔＝慣用的でない語〕の意味〔の決定〕は人間に依拠するからである。〔そして、〕彼〔＝人間〕の教示は彼の意図に従って起こるのであるから、ヴェーダ聖典の文章の意味は決して決定されないのである。

〔未完〕

略号および使用テキスト（追加）

〔註釈〕

PVV: *Pramāṇavārttikavṛtti*

"Dharmakīrti's *Pramāṇavārttika* with a commentary by Manorathanandin", ed. by Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Appendix to *JBORS*, Vol. XXIV, Part III, 1938 ff.

Pramāṇavārttika of Acharya Dharmakīrti with the Commentary 'Vṛtti' of Acharya Manorathanandin, Dharmakīrti Nibandhawali (1), ed. by Swami Dwarikadas

Shastri, Buddha Bharati Series-3, Varansai 1968.

(引用にあたっては, Sāṅkṛtyāyana 校訂本を先に, Dwarikadas Shastri 校訂本を後に示した。)

[その他のテキスト]

RP: Rjuvimalāpañcikā

Bṛhatī of Prabhākara Miśra [on the Mīmāṃsāsūtrabhāṣya of Śabaravāmin] with the Rjuvimalāpañcikā of Śalikanātha [Tarkapāda], ed. by S. K. Ramanatha Sastri, Madras University Sanskrit Series No. 3, Part I, 1934.

DhPr: Dharmottarapradīpa

Pañḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa [Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu], ed. by Pañḍita Dalsukhbhai Malvania, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. II, Patna 1971².

PrP: Prakaraṇapañcikā

Prakaraṇa Pañcikā of Śalikanātha Miśra with the Nyāya-Siddhi Jaiṣuri Nārāyaṇa Bhatta, ed. by Pt. A. Subrahmanya Sastri, Banaras Hindu University Darśana Series No. 4, 1961.

ŚBh: Śābarabhāṣya

Erich Frauwallner, *Materialien zur ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*, Wien 1968.

HB: Hetubindu

Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Hetubinduḥ, Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Teil II, Übersetzung und Anmerkungen*, Wien 1967.

註

- (1) 本稿は、「ダルマキールティの聖典観——Pramāṇavārttikasvavṛtti 和訳(1)——」(『哲学年報』第47輯, 1988 所載) および「ダルマキールティの聖典観——Pramāṇavārttikasvavṛtti 和訳(2)——」(『西日本宗教学雑誌』第10号, 1988 所載) に続くものであり, 略号等はこれらに従う。

なお, ダルマキールティの聖典観に関して, 前稿以後, 以下の論文が発表されている。

木村俊彦「ダルマキールティにおける宗教的言語論——婆羅門教との聖典論争をめぐって——」(『東北印度学宗教学会 論集』第14号, 1987, pp. 1-17)

若原雄昭「マントラの効果と全知者——Pramāṇavārttikasvavṛtti 研究(1)(vv. 292-311)——」(『佛教史學研究』第31巻第1號, 1988, pp. 1-30)

- (2) ここでヴェーダ聖典の非人為性の根拠として“作者が記憶されていないから”

および“学習に始まりがないから”という二つの証因が挙げられているが、これらは *Mīmāṃsāsūtra* や *Śābarabhāṣya* には明言されていない。ただ、これらはミーマーンサー学派の定説とみなされていたようであり、*Śābarabhāṣya* の以下の文章にそれが述べられているとされている。ŚBh. 44, 2-4: 「もし人間が [語と対象の] 関係を作って [それを] 使用させているのであれば、使用時に必ず想起されるはずであろう。」(yadi hi puruṣaḥ kṛtvā sambandhaṃ vyavahārayet, vyavahārakāle 'vaśyaṃ smartavyo bhavet.)

なお、これと同じような証因が、*Madhyamakahrdayakārikā* にもミーマーンサー学派の説として言及されている。川崎信定「バヴィヤの伝えるミーマーンサー思想」(『中村元博士還暦記念論集 インド思想と仏教』, 1978, pp. 72-73) 参照。

- (3) 以下, “作者が記憶されていないから”という証因が不成立 (asiddha) であるということが指摘される。Cf. K. 438, 21.
- (4) 等という語には, ヴァーマカ (Vāmaka), ヴァーマデーヴァ (Vāmadeva), ヴィシュヴァーミトラ (Viśvāmitra) 等が含まれる。Cf. K. 438, 22.
- (5) K. 439, 7: mithyāvādo yuṣmākam, na yūyaṃ praṇetāra iti.
- (6) 以下, “作者が記憶されていないから”という証因が不確定 (anaikāntika) であるということが指摘される。Cf. K. 440, 12.
- (7) K. 440, 14は, “vate vate vaiśravaṇa……”という文章を例示するのが, 出典不明である。
- (8) K. 441, 12: anyo 'pi vedasya kartṛtvenābhimataḥ. PVV. 375, 15; 333, 7: anya upādhyāyaḥ.
- (9) K. 441, 12-13: tathānyo 'pi vedasya kartṛtvenābhimataḥ so' py anyata upadeśam apekṣate so 'py anyata ity anādītvāt siddham apauruṣeyatvam.
- (10) Cf. G. 120, 17 ff. 本訳稿44頁参照。
- (11) Cf. G. 120, 20 ff. 本訳稿44頁参照。
- (12) K. 442, 16-17: 「たとえば, ある火が薪から [生じることが] 見られたときに, それと本性を同じくする別 [の火] もそれとまったく同じ原因をもつということが, たとえ原因が知覚されていないくても, 認識されるように。」(yathendhanād eko vahnir dr̥ṣṭas tatsamānasvabhāvo 'paro 'pi tatsamānahetur evādr̥ṣṭahetur api sampratīyate.)
- なお, この偈は, PrP. 306, 2-3; RP. 144, 15-16に引用されている。
- (13) G. 121, 21: tathāvidhāh を tathāvidhāḥ に訂正。
- (14) K. 442, 22-23: 「この場合に, 全体の意味は以下の通りである。すなわち, 世間的な語と属性を等しくするヴェーダ聖典の語も, 世間的な [語] と同様に, 人間を原因とするものであるか, あるいはまた, 決して [人間を原因とするもので

- は] ないかいずれかであろう。」(ayam atra samudāyārthaḥ. laukikena śabdena samānadharmo vaidiko 'pi śabdo laukikavat puruṣaḥetukaḥ syān na vā kaścīd apīti.)
- (15) K. 443, 19-20: 「原因が知られていない火でも、薪を原因とすると知られている火と異ならないということになれば、薪の結果であることを逸脱しない、そのようにである。」(dr̥ṣṭenedhanakāraṇenāgninābhedam anubhavann adṛṣṭakāraṇo 'py agnir yathendhanakāryatām nātivarttate tadvat.)
- (16) この偈についてK. は別の解釈を挙げている。すなわち、K. 444, 13-16: 「あるいはまた、『その場合に』とは、『ヴェーダ聖典の学習はヴェーダ聖典の学習を前提としている』というこの論証式においてである。『相違を示さずに』とは、ヴェーダ聖典を創作する直覚のない人間との相違を示さずにである。『今日、ヴェーダ聖典の学習はヴェーダ聖典の学習を前提とする、他の時も同様である。』とこのように、ヴェーダ聖典の学習という、結果の共通性が見られる[という理由]で、このような種類の証因が詳細に述べられているけれども、それらはすべて逸脱している。」(yad vā tatreti. yad vedādhyayanam tad vedādhyayanapūrvakam ity atra prayoge: apradarśya bhedaṁ iti vedakriyāpratibhārahitaṁ puruṣād viśeṣam apradarśya. idānīm vedādhyayanam vedādhyayanapūrvakam tathānyadāpīty evaṁ vedādhyayanatvalakṣaṇasya kāryasāmānyasya darśanād evamprakārahetavaḥ pravṛtanyate sarve te vyabhicāriṇaḥ.) Cf. Ś. 331b⁴⁻⁷; 276b⁴⁻⁶.
- (17) この論証式は、NAV. 31, 20-21にも引用されている。
- (18) K. 444, 22-23: anyatrāpīti* jvālāpūrvakapathikāgnisthāne 'pi. (*テキストは、atrāpīti.) Ś. 332a⁴⁻⁵; 277a³: da* ltaḥ baḥi ḥgron poṣ btaṁ baḥi meḥi gnaḥ su mṛṇoḥ par ḥdod pa la yaḥ. (*デルゲ版は de.)
- (19) K. 445, 17-18: 「炎から生起する[火]が炎を前提としかつそれ[=炎]を前提としないというのは矛盾である。また、木を擦り合わせることから生起する[火]が木を擦り合わせることを前提としかつそれ[=木を擦り合わせることを]を前提としないというのは矛盾である。」(jvālājanmano hi jvālāpūrvakatvam atāpūrvakatvam ca virudhyate. araṇijanmanaś cāraṇipūrvakatvam atāpūrvakatvam ca virudhyate.)
- (20) K. 446, 9: tatra hetubhedabhinne vahnau.
- (21) 第199偈参照。
- (22) 「ヴェーダ聖典の学習はヴェーダ聖典の学習を前提とする、学習であるから、ヴェーダ聖典の現代の学習のように。」という論証式を指す。
- (23) K. 448, 11-12: 「口蓋等の働きというヴェーダ聖典の文章の原因を排除する者は。」(vaidikānām vākyaṇām tālvādivyāpāraṁ kāraṇam apanayatā.) Ś. 335b³⁻⁴; 279b⁴: 「“これの原因はこれである、これの[原因]はこれではない。”と弁別す

る者は。」(ḥḍiḥi rgyu ni ḥḍi yin la ḥḍiḥi ni ḥḍi ma yin shes rnam par ḥbyed par byed pa.)

- (24) K. 448, 16: 「すべての語が人為的なものである, あるいは, いかなる [語] も, 世間的なものでさえ, [人為的なものではない] [かいずれかである]。」
(sarvaḥ śabdaḥ pauraṣeyaḥ syān na vā kaścil laukiko 'pi.)
- (25) K. 448, 17-18: atra jagati. Ś. 335b⁸-336a¹; 279b⁷-280a¹: ḥgro ba ḥḍi laḥam sgra-
ḥi sbyor ba ḥḍi la.
- (26) G. 123, 7: kaścīd を M. 82, 10に従って kaṃcīd に訂正。
- (27) K. 448, 24-25: 「人為的な [文章] と属性を等しくするヴェーダ聖典の非人為性を語って誤るのである, という意味である。」(pauruṣeyatulyadharmakasya vedasyāpauraṣeyatvaṃ vadan vyabhicāryate iti yāvat.)
- (28) この箇所は, NAVV. 30, 6-10に引用されている。
- (29) K. 448, 30: dīṇḍikair nagnācāryaiḥ kṛtasya purāṇasya. 'nagnācārya' (裸形の師)とあるようにジャイナ教の空衣派を指するものとも考えられるが, 詳細は不明である。なお, 'dīṇḍika' という語は, HB. 6*, 24にも見出される。Cf. HB. Teil II, Anm. II, 41.
- (30) この箇所は, 若原前掲論文註(7)に訳出されている。
- (31) 第292偈以下。若原氏が翻訳されている箇所がこれに相当する。
- (32) G. 123, 18: satyādhiṣṭhānabalā を M. 82, 18に従って, satyādhiṣṭhānabalād に訂正。
- (33) 等という語には, ジャイナ教徒 (Ārhata), 呪医 (Garuḍa), シヴァ教徒 (Māheśvara) 等が含まれる。Cf. K. 449, 24-25.
- (34) 等という語には虚言 (anṛtavacana) 等が含まれる。Cf. K. 450, 9-10.
- (35) K. 450, 18: tatpratipādite 'rthe kvacit pratipattir anuṣṭhānaṃ na syāt.
- (36) K. 450, 25: 「解毒の作用等をなすことによって, ヴェーダ聖典の [マントラ] がマントラであることが確立されるからである。」(viṣakarmādikaraṇadvareṇa vaidikānām api mantratvavyavasthāpanāt.)
- (37) K. 451, 13-14: satyaprabhavau, avitathābhidhāyipurūṣād utpannau.
- (38) K. 451, 19-20: ya imāṃ varṇapadaracanām abhyasyati tadvidhiṃ cānutiṣṭhati tasyāhaṃ yathāpratijñātam arthaṃ sampādaiṣyāmīti yā pratijñā.
- (39) 同様の文章が NBhū. 403, 20-21に見出される。
- (40) Cf. G. 123, 15-16. 本訳稿52頁参照。
- (41) K. 453, 13: santānāntarastho manogūḥ.
- (42) 等という語には, 離貪者 (vītarāga) 等が含まれる。Cf. K. 453, 20-21.
- (43) K. 453, 22-23: tatrāpi vītarāgatvādipratikṣepe.
- (44) Cf. G. 124, 27. ff. 本訳稿55頁参照。

- (45) Cf. G. 121, 2. 本訳稿45頁参照。
- (46) K. 456, 13-15: 「それを最初に学習する者、すなわち、かのヴェーダ聖典の最初の学習者が、自ら推量して、ヴェーダ聖典を学習するのであるから、[彼が] ヴェーダ聖典の作者に他ならないであろう。」 (tat prathamo 'dhyetā tasya vedasya prathamo 'dhyetā svayam abhyūhya* vedam adhīta iti kartāiva syād vedasya. *テキストは、abhyūhya.)
- (47) 等という語には、食事 (bhojana) 等の日常的営為が含まれる。Cf. K. 456, 19.
- (48) K. 456, 15-17: 「これ、すなわち、ヴェーダ聖典の学習という行為は、[ある者が] ある者から習って他者に教え、その者も別の者に [教える] というように、前々の経験によって起こる、始まらない人間の営為である、すなわち、この営為は人間によってのみ形成されるのである。したがって、決して非人為的なものではないであろう。」 (ayaṃ vedādhyāyanalakṣaṇo vyavahāra ekasmād adhyāparāṃ adhyāpayati, so 'py anyam iti pūrvapūrvadarśanapravṛtto 'nādiḥ puruṣavyavahāra iti puruṣair evāyaṃ racito vyavahāra iti syān nāpauruṣeya eva.)
- (49) 等という語には、アーリヤ族の始まらない習俗が含まれる。Cf. K. 456, 22.
- (50) K. 456, 26-27: 「父親が死んだときに息子は母親の婚礼を執り行なうべきである、というある蛮族の習俗」 (mr̥te pitari putreṇa mātṛvivāhaḥ kārya iti mlechchānām keṣāṃcid vyavahārah.) “母親の婚礼” (mātṛvivāha) は、DhPr. 15, 17-18 にも言及されており、それによればベルシャ人の (Pārasika) 習俗である。
- (51) 等という語には、輪廻から解脱するための老人の殺害等の習俗が含まれる。Cf. K. 456, 27-28.
- (52) 春に行なわれるカーマ神の祭。
- (53) 等という語には、プトラジャンマ・ウトゥサヴァ祭等が含まれる。Cf. K. 456, 29.
- (54) K. 457, 8-9: apūrvasya dharmādharmasya.
- (55) K. 457, 14: āhitasamskāra avyutpannabuddhayaḥ.
- (56) G. 125, 27: ekasyopadeṣṭuḥ を ekasyopadeṣṭuḥ に訂正。
- (57) K. 457, 27-28: 「そのうち、正しく行なわれるものとは、尊敬すべきものに対する敬意等である。誤って行なわれるものとは、愛欲をともなったもの等である。」 (tatra samyakpravṛttayaḥ pūjyapūjādayaḥ. mithyāpravṛttayaḥ kāmopasaṃhitādayaḥ.)
- (58) 等という語には文典派 (Vaiyākaraṇa) が含まれる。Cf. K. 458, 28.
- (59) K. 459, 10: arthaniveśasyārthavācakatvena pravarttanasya.
- (60) K. 459, 19は、'jarbhurāṇa' (動詞√bhur “震える”の強意活用の現在分詞) という語を例として挙げている。